

# キリスト者とユダヤ人の関係刷新とは何の謂か

— ショアー以後のキリスト教神学構築の試み — (その一)

島 山 保 男

## 1. 出発点としてのショアー<sup>1</sup>の出来事への教会の罪責告白

1933年1月30日にナチス党が政権を掌握し、ヒトラーが首相になってから、1945年5月にベルリンへ迫り来る連合軍を前にして首相官邸の地下でヒトラーが自殺し、ドイツが無条件降伏するまでの12年間、非聖書的・反キリスト教的な人種差別主義をその政策の根幹に持つナチス党は、ヨーロッパ中を戦争に巻き込んだ。このナチス政権によって苦しめられ、1941年のヴァンゼー会議による「ユダヤ人問題の最終解決」決議以後に、絶滅収容所におけるジェノサイド（民族皆殺し）の犠牲となったのは、言うまでもなくヨーロッパ在住ユダヤ人だった。

ドイツ人の好む清潔さ（Sauberkeit）に訴えつつ、清潔な帝国（Sauberreich）を目指したナチス政権は、ドイツ内部の異民族としてのシンテイ・ロマもその政策の犠牲となったが、エホバの証人や同性愛者、障害者や労働組合活動家を初めとする共産党員や社会民主党員を弾圧し、迫害し、強制収容所送りにした。そうした抑圧体制の最大の犠牲者がユダヤ人だったことは、誰しものが認めると

---

1 6百万人とも言われるユダヤ人の虐殺の出来事を、ホロコーストと言ってきたが、ユダヤ教における神殿祭儀の犠牲の動物ということで、受け身の意味合いが強かった。そこで80年代後半以後、ホロコーストという表現に換えて、ヘブル語で大きい不幸・惨禍を意味するショアーという語に取って代わられるようになった。しかし今でもホロコーストという表現は、「ホロコースト博物館」とか「ホロコースト記念館」といった公的な施設を初めとして多く使用されている。しかし本論では引用や固有名詞以外は、ショアーの語を使用する。なお、『キリスト教平和学事典』、教文館 2009年の「ホロコースト」の項目（執筆島山）および筆者の「ショアー以後に神を信じるとは何の謂か」『理想』No.678・理想社 2007年 48-57ページを参照せよ。

ころである。

この絶対悪とも言うべきナチスドイツの蛮行・凶行による犠牲者であるユダヤ人に対して教会にも責任がある、ということを告白してきたのが、告白教会に連なる神学者だったことは、つとに知られている。特にデイトリッヒ・ボンヘッファーは自分の双子の妹ザビーネの夫ゲルハルト・ライプホルツ（1901-82）がユダヤ人キリスト者だったこともあり、ナチス政府によるユダヤ人迫害には敏感に反応し、ユダヤ人問題を神学的に深め、バルトとともに戦後世界のショアー以後のキリスト教神学の展開に、大きな靈感と刺激を与え続けてきた。

かつてフランスの神学者ジョルジュ・カザリスは、「解放の神学は神学の解放抜きには成立し得ない」、と語った。その伝で言うならば、ショアー以後のキリスト教神学は、ショアーに対する罪責告白とユダヤ教との対話抜きには、そしてキリスト教神学の全面的なパラダイム転換抜きには成立し得ない。罪責告白と悔い改めによる第二の宗教改革が起らねば、キリスト教会は今後ともユダヤ教とユダヤ人に対して優越的・差別的に対応し、神の民であるイスラエルすなわちユダヤ人を否定的に評価するだろう。そして、政治権力と一体化しようところでは、今後も彼らに対する迫害を続ける過ちをやめることはないであろう。本論文はドイツ福音教会の歩みの中で、罪責告白とそれに基づくユダヤ教との対話によって、教会とその神学がどのように罪責を知覚し、それを告白し、それに基づき信仰と神学の根幹に触れる部分でそのパラダイム転換を遂行しつつあるかを、問うことを意図している。

## 2. ドイツ福音教会の罪責告白の伝統

### 2.1 シュツットガルト罪責告白

第二次世界大戦におけるドイツの無条件降伏約5ヶ月後の1945年10月18-19日に、戦争のために未だ第一回総会を開催できず、暫定委員会として活動していたジュネーヴの世界教会協議会（WCC）の代表団が、シュツットガルトを訪問した。敗戦後のドイツ福音教会とのエキュメニカルな交わりの復活を求めてのことであった。しかしその前提は、ドイツ福音教会がナチス政権時代の罪責を

告白することであった。のちに1948年のアムステルダムでの創立総会后WCC総幹事になるオランダのヴィッセルト・ホーフトをはじめとする代表団を前にして、マルティン・ニーメラーは、すでにトライザでの教会指導者会議で語ったことを繰り返した。すなわち、

ドイツの教会は悔い改めねばならず、さらにだらだらとした歩みをしてはならない。神のみ前で罪を犯したこと、そして神なき本性において囚われたことを、ドイツの教会は告白すべであり、そして教会とともにドイツ民族は告白すべきである。ドイツだけが自分本来の罪の下で苦しんでいるのではなく、オランダ・フランス・フィンランド・ポーランドがドイツのせいで苦しんでいる。――中略――教会はあまりに多く沈黙した。それでドイツ民族に、聞くべきであると言わねばならない。しかしそれは罪の赦しに基づく神の恩寵をとおして一つの新しいものにならねばならない。<sup>2</sup>

しかしすでに9月28日付のニーメラー宛の手紙で、カール・バルトは次のように要求した。

ドイツ福音教会の代表者たちは、しかし無条件に一度回りくどくせずにあなたたちとわれわれの間にあるものを処分すべきであり、それゆえ全教会において援助へ向けて備えている力に対して、ヒトラーの政治に対するドイツ民族の賛意は、「誤った道」だったこと、ドイツとヨーロッパの現在の苦境は、「この誤った道」の帰結を表現したのであり、そして最終的にドイツ福音教会は、過って語ることをとおして、そしてこの誤った道に対する誤った沈黙をとおして、共に責任あるものとなったことを、公に宣言することによって譲歩した。<sup>3</sup>

---

<sup>2</sup> Im Zeichen der Schuld. 40Jahre Stuttgarter Schuldbekentnis. hrsg. von Martin Greschat. Neukirchner 1985. S.10

<sup>3</sup> A.a.O. S.10f.

ヒトラーに対する忠誠宣誓を拒否したがゆえにボン大学を追われ、故郷のバーゼル大学からの招聘を受けてドイツを去らねばならなかったバルトは、ドイツ福音教会の将来を憂慮して、エキュメニカルな交わりの中へ再び招かれるためには、教会もそこへ落ち込んだ「誤った道」を明らかにし、その罪責を告白すべきである、と友情をもって告白教会の同労者だったニーメラーに書き送った。エキュメニカルな交わりへ復帰するためには、ドイツ福音教会にとって必要なのは罪責の告白であることを、バルトはバーゼルにいて同じスイスのジュネーヴにいたヴィッセルト・ホーフトたちの希望と願いを感じ取っていたからである。

こうした内外の思いが、エキュメニカルな各国代表団を前にして、シュツットガルトに集まったドイツ福音教会評議員会の評議員たちが、教会の罪責について論議する契機となり、その帰結として「シュツットガルト罪責告白」を発表することになったのである。その罪責とは何だったのか？「シュツットガルト罪責告白」は、次のように告白する。

EKD 評議員会は、シュツットガルトでの1945年10月18-19日の会議で、世界教会協議会の代表たちに挨拶を送る。苦難の大いなる共同体の内にあるのみならず、罪責の連帯の中にあることもわれわれが知っているよりも、われわれはこの訪問にもっと感謝している。われわれは大いなる痛みをもって次のように言う。すなわち、われわれによって果てしない苦しみが多く国民と国にもたらされた。われわれがしばしば各個教会に向けて証したことを、われわれは今全教会の名において語る。なるほどわれわれは国民社会主義の権力支配の中にその恐るべき姿を現した霊に抗して、長い年月を通じて戦ってきた。しかしながらわれわれは自らを告発する。われわれがもっと大胆に告白しなかったことを、もっと誠実に祈らなかったことを、もっと喜んで信じなかったことを、そしてもっと燃えるような思いを持って愛さなかったことを。

今やわれわれの教会において、新しい始まりがなされるべきである。聖書に基づき、あらゆる誠実さをもって教会の唯一の主に向けられて、信仰とは疎遠な影響から自らを清め、自分自身を秩序づけることに諸教会は取りかかる。われわれ

は恵みと憐れみの神に対して、神がわれわれの教会を枝の器として用いたもうて、ご自身のみ言葉を宣教し、そして教会に、われわれ自身とわれわれの全民族による彼のみ旨に対する従順を生み出す、全権を与えてくださるよう希望する。

我々がこの新しい始まりによって、エキュメニカルな交わりの内にある他の教会と心から結ばれていることを知りうるのは、われわれを深い喜びで満たすものである

教会の共同の奉仕をとおして、今日新たに力を得ようと欲する、暴力と復讐の霊に対して、全世界において制御し、そこで苦しむ人類がただ回復を見出しうる、平和の霊と愛の霊が支配をもたらすよう、我々は神に対して希望する。

かくして全世界が新しい始まりを必要とする時に、われわれは次のように願う。来りませ、創造者なる霊よ。(Veni, creator spiritus.)

シュツットガルト 1945年10月18-19日<sup>4</sup>

(以下に宣言署名者の名前が続く。)

この「シュツットガルト罪責告白」は、その宣言署名者の名前を見れば分かるように、少数派の告白教会に依りながら、ナチスドイツとその支援者たる多数派のドイツキリスト者に対する教会闘争に参加し、苦しんだ人たちだった。それゆえにすでに研究者たちが指摘しているように、自分たちは国民社会主義の政権とその精神に対して抵抗し、戦ってきたのだ、ということを罪責告白の中で表明するに至る。戦い続けたけれども、不十分な闘いだった、というのである。その思いが形容詞の比較級によって表現されている。もっと大胆に告白すべきだったし、もっと誠実に祈るべきだったし、もっと喜んで信じるべきだったし、もっと燃えるような思いを持って愛すべきだった、というのである。なすべきことをさななかったわけではないが、自分たちの闘いにおける振る舞いは不十分だった、と告白しているのである。逆に言えば、もっと大胆に告白し、もっと誠実に祈り、もっと喜んで信じれば、もっと熱い思いで愛すれば、あの出来事は起こらなかったのではないか、という主張となる。

4 Stuttgartar Schuldbekentnis「シュツットガルト罪責告白」 翻訳は引用者による。

クラッパートによれば、マルティン・ニーメラーは、彼が「シュツットガルト罪責告白」を引用する際には、比較級抜きで、「大胆に告白しなかったこと、誠実に祈らなかったこと、喜んで信じなかったこと、燃えるような思いをもって愛さなかったこと」を告白するのを常としたという。<sup>5</sup>

しかしもう一つ重要な告白がこの「シュツットガルト罪責告白」には欠落している。それはナチス政権時代のユダヤ人迫害について、そのことに対する教会の罪責に対して、一言も表明されていないことである。告白教会の神学者たちが、ユダヤ人迫害を知らなかったはずはない。なぜなら彼らが戦ったのは、そもそもナチス政府が政権奪取直後に発布した「公務員身分再建法」に含まれていたアーリア人条項、すなわち「ドイツにおいて公務員はアーリア人に限る」とする条項の教会への導入を拒否することだったからである。

## 2.2 バルメン神学宣言 ―その第一項をめぐる―

「公務員身分再建法」のアーリア人条項とは、言うまでもなく非アーリア人と規定されたユダヤ人を官僚界から追放することだったわけで、それを教会に導入するということは、国教会的な位置を持つドイツ福音教会（Deutsche Evangelische Kirche）傘下の各州教会において、ユダヤ人キリスト者の牧師を追放することであった。この要求をドイツキリスト者運動は提起し、新たに編成されたドイツ帝国福音教会はこれを遂行しようとしたのである。

この事態に遭遇して、たとえばルドルフ・ブルトマンは「教会の領域内におけるアーリア人条項」と題する論文において、洗礼を受けたユダヤ人をユダヤ人キリスト者としてではなく、もはやユダヤ人ではない者として理解しようとした。<sup>6</sup> それによってユダヤ人キリスト者の牧師に対するアーリア人条項の適用を避け、教会からの彼らの追放を阻止しようとしたことは、疑えないだろう。

<sup>5</sup> Bertold Klappert, „Bekennende Kirche in ökumenischer Verantwortung“ Christian Kaiser, München, 1988 S.18. insbes. Anmerkung 5. S.18f.

<sup>6</sup> 武田武長「ユダヤ人問題とバルト神学」、同著『世のために存在する教会』新教出版社 1995年 96ページ参照

しかしそうした善意の意図は、結果としてユダヤ人キリスト者にアイデンティティを失わせることであり、かまびすしく教会内外でドイツ的・ゲルマンのキリスト教とドイツキリスト者という民族性が主張されている時代のただ中で、ユダヤ人にはその民族性とアイデンティティを否定することを促す結果となる。

それに対してカール・バルトは、武田が指摘するように、ユダヤ人キリスト者の存在をそれとして擁護したのである。<sup>7</sup> その際バルトは、自分の立場決定をキリスト論的に考えている。ナザレのイエスの降誕から、すなわちキリストの受肉から考えて、バルトはキリスト降誕の意味を、「神がイエス・キリストにおいて人間としての存在を引き受けたもうという、全てを包括する事柄」<sup>8</sup> からだけではなく、他方で彼はナザレのイエスのユダヤ性、すなわち「救いはユダヤ人から来る」(ヨハネ福音書4.22b) という地平から考察している。「キリストは神の真実を明らかにするために、割礼ある者の僕となられた」<sup>9</sup> というのである。なぜならば、「キリストはこの民イスラエルの一員だった」<sup>10</sup>、というのがその理由である。今日われわれは次のようにバルトの文章に付加すべきである。すなわち、「二三人わが名によって集うところに、私もともにおる」(マタイ福音書8.20) というイエスの約束は、キリストが聖霊において今も私たちと共にいると信じるならば、単に歴史上の人物としてイエスがユダヤ人だったと言うにとどまらず、私たちの信仰においてイエスは今もユダヤ人なのである。

さて、こうして「公務員身分再建法」のアーリア人条項の教会への導入を巡って、民族や人種の枠を超えた万人の救済とその目的を实践すべき世界宣教を課題とする、キリスト教会の本質規定を否定するとして危機感を抱いた教会人たちは、翌年1934年5月29-31日にヴッパータールのバルメン地区のバルメン・ゲマルケ教会に集い、告白教会総会を開催し、「バルメン神学宣言」<sup>11</sup> を発信した。

7 武田武長 前掲書 同ページ ここで武田は、1933年12月にボン大学で語られたバルトの待降節礼拝説教を引き合いに出している。

8 武田 前掲書 97ページ

9 カール・バルト “Theologische Existenz heute” (『今日の神学的実存』) Nr.5 武田 前掲書 同ページ参照

10 武田 前掲書同ページ参照

11 雨宮栄一 『バルメン宣言研究』 日本キリスト教団出版局 1975 参照

6項目からなる「バルメン神学宣言」の第一項は、イエス・キリストを次のように告白する。

「私は道であり、真理であり、命である。誰でも私によらないで、父のみもとに行くことは出来ない。(ヨハネ一四,六)

「よくよくあなた方に言うておく。羊の囲いに入るのに、門からではなく、他のところから乗り越えてくる者は、盗人であり、強盗である。私は門である。私を通して入る者は、救われるであろう。」

イエス・キリストは、聖書においてわれわれに証言されているように、私たちがそれを聴き、私たちが生活においてそして努力において信頼し、従うべき、神の唯一の言葉である。

われわれがその宣教の源泉として、神のこの唯一のみ言葉の他に、またそれと並んで、さらに他の出来事や力、現象や真理を、神の啓示として承認しうるとか、承認しなければならない、といった誤った教えをわれわれは退ける。<sup>12</sup>

この「バルメン神学宣言」が、その後のドイツ福音教会の歩みにとって最も重要な里程碑となったことは、すでに周知の事実である。戦後ドイツでは、「バルメン神学宣言」を告白することによって按手を受ける牧師たちがいるのも、そのことを示している。<sup>13</sup> しかし、すでに述べたバルトのキリスト理解、すなわちユダヤ人としてのメシア・イエスという理解にもかかわらず、「バルメン神学宣言」にはユダヤ人についての言及はどこにも出てこない。ユダヤ人キリスト者出身の牧師の罷免と教会からの追放を意図した、アーリア人条項の教会への導入に対する批判からバルメン・ゲマルケ教会に集ったはずの告白教会の代議員たちが、このユダヤ人の迫害状況と、ユダヤ人キリスト者とその牧師たちの教会からの追放に対して、声を大にして直接抗議できなかったことは、何を

12 Barmer Theologische Erklärung E.ブッシュ『カール・バルトと反ナチ闘争』新教出版社 2002年、特に上巻Ⅷ「決断 バルメン神学宣言から34年」参照

13 ヴッパースール神学大学のベルトールト・クラッパート教授も、ラインラント州教会でそのようにして按手を受けた、と私に証言してくれた。



意味するのだろうか？

じつはドイツ福音教会がナチスドイツ時代から1947年のダルムシュタットにおける「ドイツ福音教会兄弟評議員会 1948年4月8日のユダヤ人問題に対する言葉」に至るまでに、ユダヤ人問題に言及するというよりもそれを神学的に取り扱い、信告白の事柄として明らかにしたのは、ボンヘッファーと、バルトの盟友で改革派の旧約学者ヴィルヘルム・フィッシャーの共同研究「ペーテル信仰告白」<sup>14</sup> のみであった。そこに教会のユダヤ人とユダヤ人キリスト者に対する罪責がある、ということになる。

しかし、それではアウシュヴィッツ以後、ショアー以後のキリスト教神学にとって「バルメン神学宣言」は何の意味もないのだろうか？ あるいはどんな意味を持ちうるのだろうか？ とりわけその第一項のキリスト論にとってどんな意味を持ちうるのだろうか？

バルメン第一項について、「これは宗教改革の根本認識の言い換えである。『キリストのみ』。キリストは神の自己提供のただ一つのみ言葉である」<sup>15</sup> とクラッパートは述べている。「神の唯一のみ言葉」としてのイエス・キリスト、これは排他的なキリスト論であろうか？ クラッパートはこれをキリスト教内部における二重の啓示理解に対する抵抗であり、批判であることを指摘し、次のように総括している。

今や「バルメン神学」宣言は、ドイツキリスト者の偽神学をこの伝統の一変形であると認識したのである。理性と啓示（啓蒙主義）、宗教的意識と啓示（シュライアーマッハー）、文化エートスと啓示（リッチェル）、宗教史と啓示（トレルチ）、原啓示と啓示（アルトハウス）、実存と啓示（ブルトマン）、という二重証言に

14 畠山保男「『ペーテル信仰告白』ユダヤ人条項の意味」『ボンヘッファー研究』No.19 2002年 19-25ページ参照 Dazu auch vgl. Wolfgang Huber, "Folgen christlicher Freiheit, Ethik und Theologie der Kirche im Horizont der Barmer Theologischen Erklärung", Neukirchener Verlag, Neukirchen Vluyn. 1983. Insbes. B.3. 'die Kirche vor der Judenfrage.' S. 71ff.

15 ベルトールト・クラッパート「バルメン宣言第一項とユダヤ人」同著『和解と希望』210ページ

替わって、今やドイツキリスト者の偽神学において、民族の法と神の律法（ゴーガルテン）、歴史的瞬間と啓示（キッテル）、民族性と創造（の啓示）（ヒルシュ）、民族のノモスと神の律法（W.シュターペル<sup>16</sup>）、歴史的な時と啓示（H.リュッケルト）という（日本語では「と」という接続詞によって、ドイツ語では —引用者註）小さなハイフンによってつなげられる、二重証言が立ち現れた。<sup>17</sup> すなわち、神学における旧約聖書とユダヤ教の廃棄もしくは軽視は、＜自然的啓示と福音＞に由来する二重証言の命題の裏面に過ぎなかったのである。

それに対して、「バルメン神学宣言」は、旧新約聖書の二重の証言の中に基礎づけられている＜神の意志＞を、唯一の二者択一として、＜われわれの願望＞に對置している。<sup>18</sup>

こうして「バルメン神学宣言」第一項は、イエス・キリストを神の唯一の言葉として告白することによって、排他的キリスト論を表現したのではなく、自然神学的二重の啓示という啓示理解を拒否することによって、教会の反ユダヤ主義を否定したのだ、とクラッパートは理解する。というのも、「バルメンで棄却された自然的啓示の教説が、キリスト教的反ユダヤ主義の根源であり、また国家の反ユダヤ主義を是認する前提であるゆえに、『より中心的なところ』である。」<sup>19</sup> からなのだ。

16 ドイツキリスト者にとって最も魅力的だった「民族のノモスと神の律法」というスローガン（いわゆるシュターペル・テーゼ）を掲げた、ヴィルヘルム・シュターペルは日本ではほとんど知られていない。テートはプロリンクホイヤーの研究に基づき、次のように記している。「広く知られたルター派の才気に満ちたジャーナリスト兼著述家のヴィルヘルム・シュターペルは、カール・バルトを神学界の危険なトーマス・マンとして、すなわち、国家敵対的態度を持ち、国家への反逆に誘うSPD教授として警戒するように呼びかけた。」H.E.テート 『ヒトラー政権の共犯者、犠牲者、反対者』 創文社 2004年 100ページ

17 バルトはこの小さなハイフンによって結ばれる二つの項目・事柄の結合を、ボン大学での1937-38年冬学期に、「自然神学の共同統治」として提示し、批判した。Karl Barth Kurze Kommentierung des ersten Satzes der Theologischen Erklärung der Barmer Synode vom 31. Mai 1934. In ders. Texte zur Barmer Theologischen Erklärung. Theologischer Verlag Zürich 1984. S.74.

18 前掲書214ページ

19 クラッパート 前掲書222ページ

バルメン第一項が、キリスト教的反ユダヤ主義の根源たる自然啓示、あるいは自然神学における一般啓示とキリストにおける特殊啓示という二分法による啓示理解を退けたことは、結果として次のことを意味する。すなわち、それによって特にシュターペルにおける「神の律法と民族のノモス」の接続もしくは連続の線を肯定し、ドイツキリスト者たちがタナハを否定的に評価し、それに取って代わってまさに『民族のノモス』としてのゲルマン精神やらドイツ民族の宗教文化やらを自分たちの「旧約聖書」として理解する道を開いたその根源を絶ち切ること、バルトの起草になる第一項の目的は、これだったのである。そのことによってユダヤ人のユの字も表現せずにはあるが、バルメン第一項はユダヤ教とキリスト教の相互連関とタナハのキリスト教における意義付けと、契約理解の転換とユダヤ人イエスの再発見という、ショアー以後のキリスト教神学に先鞭をつけたのである。それ故クラッパートは次のように述べる。

バルメン第一項こそはじめて<ユダヤ人問題>の全射程を見る視野を解放する。そのようにバルトは理解した。つまり、バルメン第一項は<ユダヤ人問題>をユダヤ人キリスト者問題に、すなわちアーリア人条項の教会への導入に限定することを不可能にしたのである。むしろバルメン第一項は、国家のユダヤ人政策と強制収容所や人種理論によるユダヤ人の取り扱いに対する批判的な問いを提起させたのである。<sup>20</sup>

クラッパートの解釈によれば、バルトはこの点で、「教会におけるアーリア人条項の是認と国家によるアーリア人種の絶対化の是認の根源」を、「自然神学」に見ていたのである。<sup>21</sup> この理解からバルトの結論は、「まさにバルメン第一項に基づいて、アーリア人条項と全体主義国家とを否認」<sup>22</sup> する、ということになる。ヘルムート・ゴルヴィッツアーもバルメン第一項が全体主義国家と指導

---

20 同著者 前掲書223ページ

21 同著者 前掲書同ページ

22 同著者 前掲書同ページ

者原理に対する拒否であると理解した。これは「全体主義国家と指導者原理の拒否であり、その権威をとおしてドイツが統一され、救済されるべき唯一の声に対する拒否であり、この指導者と彼の党のこの唯一の声に対する信頼と従順の取り消しであり、ドイツ民族の民族的な決起のけたたましい誤った調べの取り消しであり、その分裂は信仰告白的にもただちに民族統一という関心において克服されるべきだったのである」<sup>23</sup>、と「バルメン神学宣言」50周年にバルメン・ゲマルケ教会での記念講演で語ったのである。

バルメン第一項における「神の唯一の言葉」としてのイエス・キリストへの告白を、バルトの理解との関連でクラッパートは、「ドイツキリスト者の異教主義に反対して排他的に表現されているが、しかしその際ユダヤ教の固有な証言の真理生に対しては、包括的に開かれている」<sup>24</sup>、と結論づけるのである。

以上、「バルメン神学宣言」第一項におけるキリスト告白の意味を、ショアー以後のキリスト教神学との関連で、その第一項のみに焦点を当てながら考察してきた。「バルメン神学宣言」の新たな包括的な研究は、今後の課題である。

さて、次にドイツ福音教会の罪責告白においてきわめて重要な、「ダルムシュタットの言葉」について論じて行きたい。なぜなら「ダルムシュタットの言葉」は、「バルメン神学宣言」を引き継ぎながら、ドイツ福音教会の戦後最初の罪責告白である「シュツットガルト罪責宣言」を具体化し、深化させ、そして訂正しているからである。

## 2.3 ダルムシュタットの言葉

ドイツ福音教会（EKD）兄弟評議員会は、1947年8月8日にダルムシュタットで会議を開き、「ダルムシュタットの言葉」<sup>25</sup>を発信した。この宣言は、「シュツッ

23 Helmut Gollwitzer Das eine Wort für alle. In Das eine Wort für alle. Barmen 1934-1984. Eine Dokumentation. Hrsg. Von Hans Ulrich Stephan. Neukirchner Verlag. 1986.

24 同著者 前掲書232ページ

25 これまで「ダルムシュタット宣言」として日本では知られてきたが、本論文では

トガルト罪責告白」を深め、具体的な事柄を挙げて罪責を告白している。それと同時に、すでに始まっていた冷戦時代における東西対立、すなわち資本制経済システムの自由主義陣営と計画経済システムを採る共産主義陣営との戦争一歩手前の（だから熱い戦争としての実際の戦争ではなく、冷たい戦争＝冷戦と呼ばれたのだが）イデオロギー対立を批判し、和解の使信を発信している。

ドイツを巡る1947年の状況が、『ダルムシュタットの言葉』のコンテクストをなしている。ルードヴィヒはそのコンテクストを次のように要約している。

ドイツを占領していたソヴィエト連邦、アメリカ合衆国、フランス、そしてイギリスの外務大臣（・国務長官 引用者付加）が、この年モスクワとロンドンに集まり、ドイツ問題について協議した。いわゆるトルーマン・ドクトリンが冷戦の始まりを予示していた。マーシャルプランが（後の西ドイツの経済復興を促しただけではなく ー引用者）、ドイツの分断を誘発させた。ドイツの各州の首相会議は頓挫し、東西の政治的・経済的な対立は深まった。にもかかわらず人々は憧れをもって一つのドイツ国家の形成を希望していた。<sup>26</sup>

このコンテクストにおいて、ドイツ福音教会の兄弟評議員会が発信したのが、以下に記すいわゆる『ダルムシュタットの言葉』である。

「われわれ民族の政治的な道に対するドイツ福音教会兄弟評議員会の言葉」（ダルムシュタットの言葉）

第一項 われわれにはキリストにおける神との世界の和解の言葉が語られて

「ダルムシュタットの言葉」と訳す。テキストは、Hartmut Ludwig “Die Entstehung des Darustädter Wort” “Junge Kirche” Beiheft zu Heft 8/9 1977 Dazu auch Bertold Klappert “Bekennende Kirche in ökumenischer Verantwortung” Christian Kaiser, 1988. S.12f. 日本語訳は、武田武長 前掲書142ページ以下。その解釈は、同著者「世のために存在する教会 ダルムシュタット宣言とフランクフルト宣言に見る教会の政治的神奉仕」、『世のために存在する教会』 139ページ以下を見よ。

26 Haltmut Ludwig, a.a.O.S.24f.

いる。この言葉をわれわれは聞き、受け入れ、実行し、伝えなければならない。もしわれわれが自分自身のそれと同様にわれわれ全体の罪責から、すなわち父祖たちの罪責から解放されないならば、そしてドイツ人としてわれわれの政治的な意志と行動において過ちに陥った、全ての誤った悪しき道から、われわれが良き羊飼いであるイエス・キリストによって呼び戻されないならば、この言葉は聞かれず、受け入れられず、行われず、そして伝えられない。<sup>27</sup>

この第一項において、和解の使信が冒頭で語られ、次いで「全体の罪責から、父祖たちの罪責から解放されないならば、ドイツ人としての再生の道はない、というのである。「われわれの政治的な意志と行動において過ちに陥った、全ての誤った悪しき道」が、その罪責である。しかしこれではまだ罪責の具体性には触れていない。ドイツ福音教会にとって何が具体的な罪責なのか、それが第二項から第五項までの告白である。

第二項　　あたかもドイツの本質によって世界が回復しうるかのように、特別なドイツ的使命がある、とわれわれが夢見始めたときに、われわれは過ちに陥った。そのことによってわれわれは政治権力の無制限な行使に道を備え、わが民族を神のみ座においた。われわれが自分たちの国家を内に向けては強い政府の上へのみ、そして外に向けては軍事的な権力拡大の上へのみ基礎づけようとし始めたのは、宿命的であった。それによって諸民族共通の課題への奉仕において、われわれドイツ人に与えられた賜物をもって共に働くための自分たちの召命を、われわれは否定したのである。

第二項における具体的な罪責は、ナチズム、超国家主義（ultranationalism）、排外主義において陥った過ちが問題である。ドイツの使命なんぞということを夢見始めたことが、全体主義国家としてのナチス政権へ道を開いた、というのである。これには長いドイツ民族主義の歴史と結びつき、それに教会もまた深

---

27 翻訳は著者による。

く結びついてきた歴史的経緯があり、そのことを罪責として告白している。このドイツ民族主義が絶対化されたところに成立したのが、ナチズムであった。そのナチズムにドイツキリスト者運動が同調したことは、十戒第一戒を侵犯した背きの罪であり、その点で教会に罪責がある、という告白である。<sup>28</sup> 日本においても同様に神権天皇制国家体制が、「現人神天皇」を崇拜の対象とする国家神道を基軸として神社参拝を強要し、それに抵抗した朝鮮キリスト教会とそのキリスト者を弾圧し、天皇と日本民族を神の座においたことを、われわれは忘れてはならない。この罪責を認識し、罪責を引き受け、告白したのが、日本キリスト教団の「戦争責任告白」だったことは、言うまでもない。<sup>29</sup>

ついで第三項においてそのことがさらに具体的に罪責として告白される。

第三項 人間の社会生活において必然的になってきた新秩序に対して、われわれがキリスト教戦線なるものを樹立し始めたときに、我々は過ちに陥った。古いものと元からあるものを保守する権力との教会のつながりは、われわれに困難をもたらした。人間の共同生活のそのような変化を要求するところで、生活様式を換えるためにわれわれに許され、また命じる、キリスト教的自由をわれわれは裏切った。われわれは革命の権利は否定したが、絶対的な独裁制への発展は許容し、歓迎したのである。

---

28 武田 前掲書 153ページおよびベルトールト・クラッパート 「ダルムシュタット宣言のエキューメニカルな意義」、同著者『和解と希望』新教出版社 1993年 334ページ参照

29 しかし、「ダルムシュタットの言葉」も日本キリスト教団「戦争責任告白」も、受容されてきたというよりは、拒絶されてきたという事実の前にわれわれは立たされている。クラッパートは、ダルムシュタットの言葉の「教会内での排除とエキューメニカルな意義との間の矛盾」について語った。クラッパート前掲書321ページ以下。著者は1997年にアルノルツハインで開催されたエヴァンゲリーリッシュ・アカデミー主催の「ダルムシュタットの言葉」50周年記念集会に参加する機会があったが、ヘッセン・ナッサウ州教会議長が最終日の挨拶に立ち、否定的な評価を述べた上で、「ダルムシュタットの言葉は、われわれにとってすでにけりをつけた事柄である」(“Darmstädter Wort ist uns schon die erledigte Sache.”)、と述べたことをここに記しておきたい。

キリスト教戦線なるものは、すなわち反共産（＝反共）主義の戦線だった。そのことをとうしてキリスト教と所与の保守的権力との同盟が、その意図とは反対にキリスト教的自由の喪失を結果としてもたらした、というのである。なぜなら「絶対的な独裁制への展開は許容し、歓迎」することになったからである。これがドイツキリスト者運動において、ナチズムとその政権に深く結びついた理由の一つであった。教会と保守勢力との結びつきは、第一次世界大戦以後のヴァイマル共和国を、「初めから革命の汚点がついていた」<sup>30</sup> 政治体制とみなしたのである。このヴァイマル憲法に基づく共和国の体制を否定する勢力と結びついた教会は、そのことによって1933年1月30日のナチスによる政権奪取に道を開くことに加担したのである。

第四項はナチズムとそれに加担したドイツキリスト者運動を批判している。

第四項　政治生活において、そして政治手段を伴って、悪人に対する善人の、闇に対する光の、不義なる者に対する義人の戦線を形成しなければならない、とわれわれが考えたときに、我々は過ちに陥った。それと共に、政治的・社会的・世界観的な戦線の形成により、全ての人々に対する神の恵みの自由な提示を変造し、世界をその自己義認に委ねたのである。

ここで善人対悪人、光対闇、不義（なる者）対義人という二項対立的・二元論的な世界観・人間観が問われている。これがあらゆるカルトの世界観と人間観の基礎的前提であり、かつその帰結であることは、言うまでもない。ナチズムやファシズムもまた政治的形態をとったカルトと言えるのである。かつてラインホルド・ニーバーは、『光の子と闇の子』<sup>31</sup> において、当時の世界状況を踏まえながらファシズム・ナチズムを闇の子と捉え、それに抵抗する自由主義陣営と共産主義陣営を光の子として理解した。しかしこうした二元論的なグロー

30 G- Brakelmann, Das Darumstädter Wort von 1947 und die Tradition des neuzeitlichen Protestantismus”. クラッパート前掲書337ページより引用。武田前掲書154ページ参照

31 Reinhold Niebuhr “Children of Light and Children of Darkness” Macmillan 1985.



バルな政治勢力の把握に問題はなかったのかどうか、今日われわれは問わねばならない。こうした二元論的世界政治の神学的解釈は、ニーバーがルター派神学者であったことと深く関連している、とすべきであろうか？ こうして第四項において、キリスト教的反共主義は、無神論的マルクス主義を神否定の悪魔の教説として理解し、そこから単に反共主義を標榜するというだけで、聖書の使信に真っ向から対立する人種論的反セム主義をその世界観の骨格とするナチズムをたやすく肯定的に評価し、支援し、同盟を結ぶに至ったのである。ここに教会の罪責がある、と「ダルムシュタットの言葉」は告白している。

第五項はそのことをマルクス主義否定という教会の態度決定との関連で言及し、その過ちを告白する。

第五項　マルクス主義的教説の経済的物質主義<sup>32</sup>は、この世における人間生活と共同生活に関する教会の委託と約束に対して、教会に警告しなければならなかったのではないかと、ということを見過ごしたときに、われわれは過ちに陥った。来たりつつある神の国の福音に即して、貧しい者や権利を奪われた者の事柄を、キリスト教の事柄とすることを怠ったのである。

「ダルムシュタットの言葉」の中でこの第五項がもっとも激しい反対に会い、拒絶された。第五項は最初にハンス・ヨアヒム・イーヴァントが草稿を書き、それを元にバルトが大幅に訂正し、それが討議に付された。<sup>33</sup>

イーヴァントは草稿の第五項で次のように記した。

32 訳語の問題であるが、der ökonomische Materialismus を経済的物質主義とする。Materialismusを唯物論とする訳がこれまでの定訳であるが、マルクスの思想を唯物主義（ただものしゅぎ）とするのは、全くの誤解である。人間社会とその歴史的展開の決定要因は経済的な下部構造の構成要素であるということは、そのみがあればこと足れり、ということを意味しない。霊魂や精神との対比において物質を卑しめ、貶め、低く評価するのは、ギリシャ思想であり、その影響を深く被ったギリシャ化されたキリスト教（ハルナックのいわゆるdie Hellenisierung des Christentums）ではあっても、聖書の使信ではない。その意味でユダヤ人マルクスの思想は、聖書と響き合う。

33 Hartmut Ludwig.a.a.O. S.28 イーヴァント草稿の訳は、武田前掲書148ページ以下参照。引用文の訳は著者による。

—前略— 地上にある神の教会は、あらゆる悪なる思想から純化され、世俗の権力の戯れのなかで自由にとどまるべきである。もし神の教会がもう一度、キリスト教かマルクス主義かという言説によって規定されるならば、しかし自分の奉仕のこの純粹さと自分の証言の自由を失うだろう。われわれが証言に向けて権利と自由を要求され、そしてその権利と自由に対して政治的に従い、それらに対してわれわれがキリスト者として抵抗すべきだったときに、この言説はわれわれを沈黙することへと誘ったのである。

キリスト教かマルクス主義かという二者択一的選択の問題を立てるならば、民族主義的な立場にキリスト教が立ち、反民族主義的・非愛国的な立場にマルクス主義がその国際主義の故に立つ、という二項対立的な理解の元で、ついには沈黙を強いられ、再び奉仕に対する純粹さと証言に対する自由を失う危険を、イーヴァントは指摘している。そして神ならざる者に膝を屈めることになる、と警告したかったのである。

このイーヴァントの草稿に対して、当時ちょうどボン大学の客員教授としてドイツに滞在していたカール・バルトは、ダルムシュタットのこの会議に招待され、訂正稿を書いた。「ダルムシュタットの言葉」第五項に対応するのは、バルトの草稿では第四項である。それは次のような罪責告白だった。

マルクス主義的教説における経済的物質主義が、教会によってしばしば忘れられた聖書の真理（肉体の蘇り）のひとつの重要な要素を、新たに明らかにしたことを、われわれが見過ごしたことによって、われわれが非聖書的に精神主義的キリスト教をそれと対立させたことによって、そしてわれわれが貧しい者の事柄を、神の来たらんとするみ国についての福音の熟考された光において教会の事柄にすることを、この誤った闘争の前線において怠ったことによって、われわれは過ちに陥ったのである。<sup>34</sup>

34 Hartmut Ludwig, aa.O. S.30 引用文は著者の訳による。

「ダルムシュタットの言葉」第五項と、その元になったイーヴァントとバルトの草稿を比較すれば、イーヴァントはキリスト教かマルクス主義かという、1947年の時点での冷戦構造の時代精神における対立図式を批判している。「ダルムシュタットの言葉」全体の、そして特にこの第五項のコンテクストは、言うまでもなく第二次世界大戦終結直後からすでに始まった、アメリカとソ連を対立軸とする、東西冷戦の時代の幕開けである。特にドイツは東西冷戦の直接的影響の元、周知のように、ソ連軍占領地区とアメリカ軍・イギリス軍・フランス軍占領地区の固定化により、東西ドイツという分断国家として冷戦構造の最前線を生き続けることになった。この東西冷戦の時代精神は、教会をして自由主義の資本制経済システムの国家群と自らを同一化させ、逆に自由権を制限してでも平等権を前面に押し出す、社会主義の計画経済システムの国家群を敵視する姿勢を取らせることになった。

こうした反共主義の喧しいコンテクストにおいて、イーヴァントの草稿に対して、マルクス主義の意義！について、バルトが本質的で決定的な事柄を表現していることも明らかである。そして「ダルムシュタット宣言」第五項は、バルトの草稿から多くを採用したことは、イーヴァントの草稿とも読み比べてみれば、明らかである。

バルトは「マルクス主義的教説における経済的物質主義」を積極的に評価し、それが肉体の蘇りという聖書的真理の重要な要素であることを明らかにした。しかも教会はしばしばこの聖書的真理を忘れてきた、と言うのである。これは当時の神学者の中で、バルトにして初めて表現しえたマルクス主義への評価である。と同時に、唯物論か唯心論か、マルクス主義かキリスト教か、という冷戦時代に突きつけられた二元論的・二項対立的立場決定を超えて、そうした問いを無効にする質を持って、バルトは「マルクス主義的教説における経済的物質主義」を「体の蘇り」という、まさに霊肉二元論の立場を採るギリシャ人には躓きであった信仰告白から、パンの現実として理解したのである。この「体の蘇り」という信仰告白によって、ギリシャ的・グノーシス主義的なイデア的（理念的・観念的）・グノーシス（天的知識）優先の観念的・唯心論的思想からの攻撃にさらされながらも、古代教会はタナハ（教会の言う旧約聖書）以来の使信

を守り、保持したのである。

その生涯において二度にわたり、一度は亡命中のレーニンによって指導された、すなわちレーニン主義政党としてのスイス社会民主党の黨員として、二度目にはナチス政権の弾圧に抵抗するために知識人黨員の名目的離党を指導していたドイツ社会民主党に、その時期に黨員として入党したのが。まさにバルトなのである。そしてヒトラーへの忠誠宣誓を拒否してボン大学を追放され、バーゼル大学から招聘を受けてスイスへ戻るまで、いやそれ以後もバルトはスイスから、バーゼルから告白教会を支援し続けたのである。こうして彼は悪しき時代精神と「今日の神学的実存」をもって戦い続けた。<sup>35</sup>

バルトは草稿第四項をさらに続けて、「非聖書的に靈的キリスト教をそれに（すなわちマルクス主義的教説における経済的物質主義に＝引用者注）対立させた」、と教会の姿勢を批判する。そこでバルトが言挙げしている「精神主義的キリスト教」(spiritualistisches Christentum) とは何であろうか？ このキリスト教は、バルトの草稿が示しているように、「マルクス主義的教説における経済的物質主義」が、「体の蘇り」という信仰告白における歴史と人間社会のパンの現実に向き合い、「貧しい者の事柄」を自分の福音宣教の事柄として受け止めるべきであり、受け止めるはずなのに、受け止めることの出来なかった教会を指している。「貧しい者の事柄」こそは、後にラテンアメリカ司教団がペルーのメデジンで、「神は貧しい者を優先的に選ばれる」と宣言し、そこから解放の神学が成立し、神学のパラダイム転換を促した重要な主題となったことは、もはや周知の事柄である。<sup>36</sup>

しかも教会は単に「経済的物質主義」を受け止め損ない、拒否したにとどまらず、「貧しい者の事柄」を「教会の事柄にすることを、この誤った闘争の前線において怠った」、とバルトは指摘している。「貧しい者の事柄」を「教会の事柄」とすること、しかも来たらんとする神のみ国の光においてそうすることを怠り、

35 エーバーハルト・ブッシュ 改訂新版『カール・バルトの生涯』 新教出版社 1995年参照 Vgl. auch F.-W. Marquard, "Theologie und Sozialismus. Das Beispiel Karl Barths." Chr. Kaiser, München, 1985.

36 グスタヴォ・ゲテエレス 『解放の神学』 岩波書店 2000年参照

しかも反共精神・反社会主義精神をもって無神論的物質主義への闘争にうつつを抜かして怠ったこと、これがバルトの批判する教会の4つ目の罪責なのである。

クラッパートは第五項の解釈に際して、ボンヘッファーの非宗教的解釈という言葉を用いて理解しようとしている。ボンヘッファーの非宗教的解釈の前提は、成人した世界という認識である。「すなわち、成人した世界が、その無神性の中で「この世で共同してより良い認識を得る」ことの再構築であった」<sup>37</sup> 教会は無神論や物質主義を恐れるべきではない。そこで問われていることを教会に向けられた問いとして真摯に受け止め、科学技術によって新たな展開を見た近代以降の市民社会の世俗化し、非宗教化したコンテクスト<sup>38</sup>の中で、一神教と無神論の相違よりもむしろ貧しい者・抑圧された者の解放をめざす聖書と（物質主義的）社会主義の類似性にこそ目を向け、そこでの宣教の課題を果たすべきである。

以上、第二項から第五項まで四項目にわたり、歴史的なコンテクストにおいて教会が過ちに陥った罪責とその告白を分析してきた。この四項目に亘る具体的な罪責告白の後、第六項は次のように宣言する。

第六項　そのことを認識し、告白することによって、イエス・キリストの教会として、神の栄光に対する、そして人間の永遠的で時間的な救済に対する、新しくさらに優れた奉仕へ向けて解放されることを、われわれは知っている。キリスト教と西洋文化というスローガンではなく、イエス・キリストの死と復活の力における神への方向転換と隣人への立ち帰りが、われわれ民族に、そしてわれわれ民族のただ中でとりわけキリスト者に必要なのである。

37 クラッパート 『和解と希望』 342ページ

38 ボンヘッファーの『成人した世界』の概念が、ハーヴィ・コックスの『世俗都市』（新教出版社）へ繋がったことは、つとに知られている。しかし問題は、ボンヘッファーが予測したような非宗教化という社会現象が世俗世界に現出し、一般化したのか、ということである。日本における心霊現象、スピリチュアリズム・カルト、オカルトへの関心・隆盛はその逆を行っているように見える。日本の教会はこの現象に適切に対応できるのか、問いまわられていることを、現在のコンテクストとして認知すべきである。

「キリスト教と西洋文化というスローガン」についての批判は、言うまでもなくその一体化・一体視に対するそれである。こういう文化的プロテスタント主義以来のキリスト教信仰と文化との蜜月関係を、第六項は批判する。キリスト教は文化の形成力となるべきであり、福音にその力があつたからたとえば近代市民社会の形成の一翼を担ってきたが<sup>39</sup>、それは福音が創造的な形成力として機能したのであって、両者の一体視はかえってその形成力を失う。<sup>40</sup>最後の第七項には「バルメン神学宣言」第二項が引用されている。

第七項 われわれは次のことを証言してきたし、今日新たに証言する。すなわち、「イエス・キリストをとうして、この世界の神なき結びつきから神の被造物に対する自由で感謝すべき奉仕へと至る喜ばしき解放が、われわれに与えられる。」それ故にわれわれはたえず願う。すなわち、絶望をあなたたちを超えた主にさせてはならない。というのもキリストが主だからである。全ての信仰なき無関心に別れを告げ、より良い過去についての夢によって、あるいは来たりつつある戦争に対する思弁によって惑わされずに、この自由において、そして大いなる平静さをもって、全ての人が、そしてわれわれ一人一人が、法・福祉・内的平和と諸民族の和解に仕える、より良いドイツ国家機構の建設に果たすべき責任を自覚せよ。

引用符に括った文が「バルメン神学宣言」第二項の一部である。イーヴァントの草稿にこの引用を付加したのは、マルティン・ニーメラーだった。ニーメラーは「バルメン神学宣言」と「シュツットガルト罪責告白」に深く関与したことから、この引用を付加したのである。それによって彼は「シュツットガルト罪責告白」をバルメン第二項の引用により関連させ、「ダルムシュタットの言葉」の最後を

39 マックス・ヴェーバー 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 大塚久雄訳 岩波文庫参照

40 リチャード・ニーバー 『キリストと文化』 オンデマンド版 日本キリスト教団出版局 2011年参照

閉めようと意図したものと思われる。八項目からなるニーメラーの草稿の当該箇所は、第七項である。

ニーメラーの草稿第七項 神の教会としてわれわれは次のことを証言した。すなわち「イエス・キリストをとうして、この世界の神なき結びつきから神の被造物に対する自由で感謝すべき奉仕へと至る喜ばしき解放が、われわれに与えられる。」福音をとうして無罪放免されること、そして新しい生の始まりへと解放されることが、この教会にとってあらゆる希望喪失のただ中における希望の徴と道であり、あらゆる束縛のただ中における自由の徴と道であり、引き裂かれた人間世界のただ中における神の和解の上に基礎づけられた交わりの実現である。自分の主の約束に従って、教会は山の上にある町である。— もし教会が自分の自由を売り渡し、自分の奉仕を拒否するならば、それによって神ご自身が教会に人間の救いへ向けて委託した約束を放棄するならば、それは不信仰である。<sup>41</sup>

このニーメラーの草稿が検討され、承認されて、「バルメン神学宣言」第二項の一部が引用されることになった。武田武長が指摘するように、この引用によって、単に「ダルムシュタットの言葉」第七項のみならず、第一項から最後まで宣言全体が「バルメン神学宣言」第二項の枠内に位置づけられ、その「神学的認識に厳密に対応している。」<sup>42</sup>あるいはクラッパートが解釈するように、『「ダルムシュタットの言葉」』は、シュツットガルトのエキュメニカルな罪責宣言を具体化するだけでなく、それを徹底化する。<sup>43</sup> いやクラッパートはさらに、「ダルムシュタットの言葉」が「シュツットガルト罪責告白」を訂正している、と主張する。それは後者が「なるほどわれわれは国民社会主義の権力支配の中にその恐るべき姿を現した霊に抗して、長い年月を通じて戦ってきた」、とオットー・

41 Hartmut Ludwig, aa.O.S.30

42 武田武長 前掲書146ページ

43 Bertold Klappert, “Bekennende Kirche in ökumenischer Verantwortung”, S.18.

ディペリウスの提言を受容して、自己肯定的に語るからである。それと比較して、前者は「我々は過ちに陥った」、と率直に教会の罪責を告白する。特に第三項の終わりに、「われわれは革命の権利は否定したが、絶対的な独裁制への発展は許容し、歓迎したのである」、と指摘することによって、ナチズムとその政権に対する教会の責任を具体的に挙げ、その罪責を告白している。<sup>44</sup>

### 3. おわりに

しかしユダヤ人に対する罪責告白が、具体的にその名を挙げて告白されることは、残念ながら「ダルムシュタットの言葉」においてもなかった。そのことを意識して、翌年1948年4月にドイツ福音教会兄弟評議員会の評議員たちが再びダルムシュタットに集い、討議して発信したユダヤ人問題についての使信が、「ドイツ福音教会兄弟評議員会 1948年4月8日のユダヤ人問題に対する言葉」<sup>45</sup>である。しかし残念ながら紙幅も尽きるので、「ユダヤ人問題に対する（ダルムシュタットの）言葉」を全文紹介し、分析することはできない。これ以後のドイツ福音教会の罪責告白とユダヤ教との対話については、稿を改めて発信したい。

---

44 B.Klappert, a.a.O. S.19

45 “Bruderrat der Evangelischen Kirche in Deutschland Wort zur Judenfrage vom 8.April 1948” in “Die Kirchen und das Judentum Dokumente von 1948 bis 1985” . hrsg.von Rolf Rendtorff und Hans Hermann Henrix. Verlag Bonifatius Druckerei Paderborun und Chr.Kaiser München. S.540-544